

昭和二十八年四月一日 初版印刷
昭和二十八年四月五日 初版發行

昭和文學全集 10

安倍能成 辰野 隆集
天野貞祐

著者

安倍能成
天野貞祐
辰野 隆

發行者

角川源義

印刷者

仙葉元太郎

東京都新宿區東大久保二ノ七八

・發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

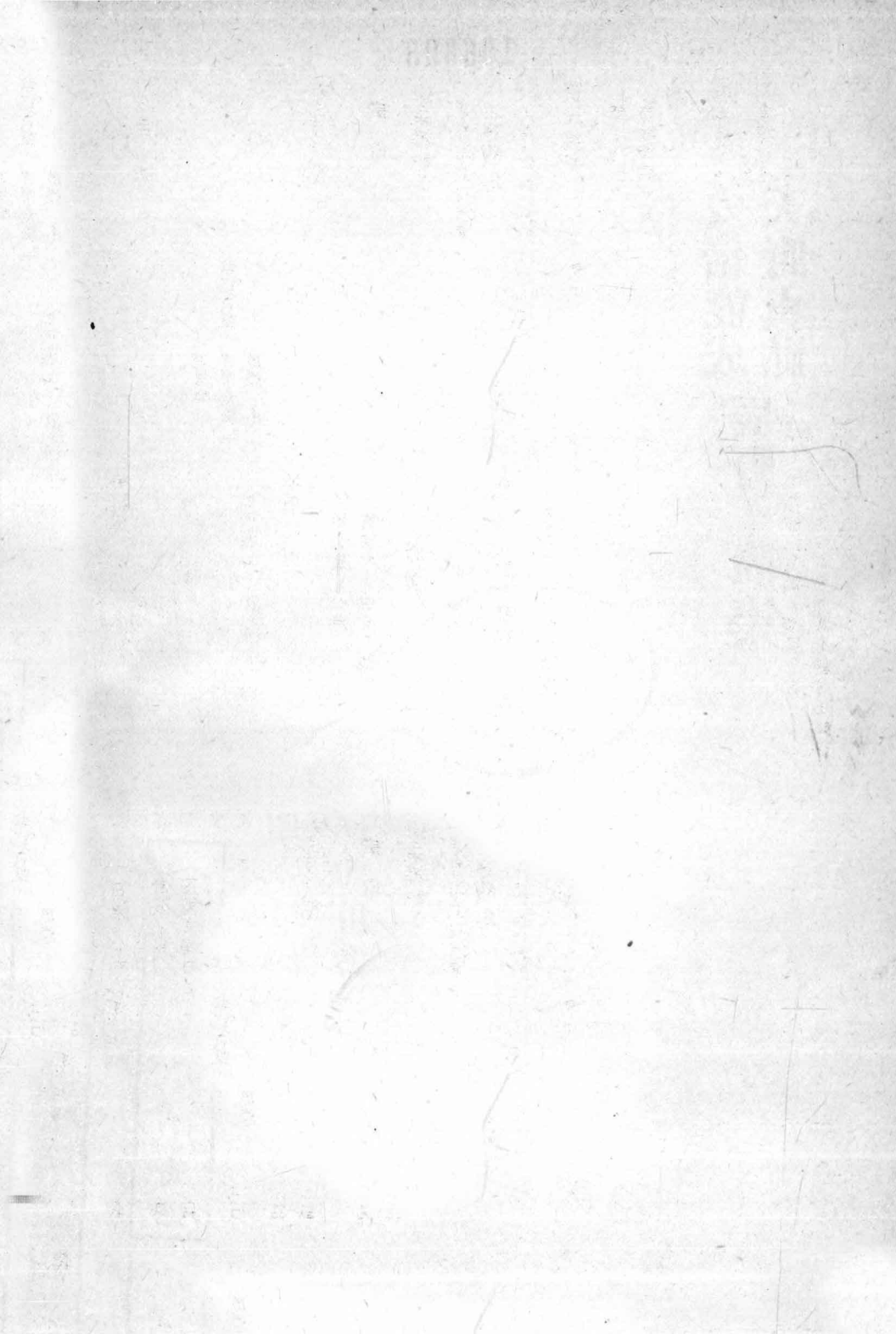
角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クロース 日本クロス工業株式會社
整版所 曉印刷株式會社
印刷所 中教印刷株式會社

安倍能成
天野貞祐
辰野
隆集

昭和文學全集
角川書店版



目次

巻頭寫眞

安倍能成
天野貞祐
辰野 隆

草野集

はぐ

食味の記憶

寺田さん

世阿彌の「ものまね」論

朝暮抄

隨筆を書く心持

三重吉の小説その他

青年と教養

人間としてのスピノザ

自然・人間・書物

瞥見のスカンディナヴィア

三つの心得

巷塵抄

母のこと

岩元先生のこと

戦中戦後

剛毅と眞實と智慧とを

米國教育使節團に對する挨拶

頭の切替へ

安倍能成集

筆 蹟

山中雜記

夏目先生の追憶

距離感

人間としてのケーベル先生

青丘雜記

淺川巧さんを惜む

京城街頭所見

——朝鮮で見る日本の生活——

静夜集

東雲さま

——旧舎の一少年の見た能樂——
マールカス・シヨウ

日本人として

岩波と私

茅野夫婦のこと

平和への念願

平和宣言

私の所信

市原豊太

解説
年譜

二九
三三

九

九

一四

二〇

二〇

二三

二九

三三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

辰野 隆集

筆 蹟

信天翁の眼玉

ヴィリエ・ド・

リイラダンに就いて

さ・え・ら

クレマンソオの言葉

佛蘭西人

日本人

逸 話

エドモン

穀子の一擲

ジャン・コクトオ

あ・ら・かると

春日閑談

食 事

映畫妄談

孤島へ携へゆく一書

忘れ得ぬ人々

濱尾新先生

露伴先生の印象

上田萬年と齋藤綠雨

夏目漱石

寺田寅彦

舊友谷崎潤一郎

舊友二人

父の書齋

僕の書齋

爐邊閑語

巴里の散策

老書生獨語

我が師我が友

弟子

ひとりごと

顔

酒に眞あり

フランスのブランディの味

一中・一高・東大

書物のゆくへ

シャンパン・グラス

ミス日本に寄せて

ポオドレエル研究序説

——詩人の態度——

年 解 説
譜 説

鈴木力衛

三六

三三

二九

二八

二七

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二〇

一九

一八

一七

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

〇九

〇八

〇七

〇六

〇五

〇四

〇三

〇二

〇一

三〇

二九

二八

二七

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二〇

一九

安倍能成集

山勢似太木

日女如小女

歸屯編句

詩成

山中雜記

夏目先生の追憶

一

自分は夏目先生の弟子であらうか、先生の門人であらうか。世間からはさういふ風に考へられてゐるらしい。現にさういふ風に考へて、自分達の先生に對する關係を、昔の宗匠とその弟子との關係のやうに見、それを大正の今日にあるべからざることだといきまいて論じた人もあつた。自分がそのやうな關係において先生の弟子でなかつたことはいふまでもない。それに自分は第一に創作家たる先生の創作上の弟子でもなかつたし、また思想上の方面において先生から特別に影響を受けた思想上の弟子だとも思はれない。自分の考へかたを無理に先生の考へかたと結合して團體的に見られることは、實をいへば自分に取つて迷惑であつた。しかし自分がさまざまな點において敬愛したる、ことに人格と教養との點において敬愛を傾け得たる先達としての意味、しかも自分が十分親しみ、懐しみを感ずる得られるまでの個人的關係を有した先輩の意

味においては、先生は實に、自分が先生と呼び得る少數者中の最も代表的なる者であることは否定されない。

始めて先生の名を知り、またよそながら先生の風貌に接したのは、先生が松山の中學校にこられ、自分がまだ小學校の生徒であつた二十三年も前のころである。それらの思ひ出も記しておきたいとは思ふが、自分のいまここに書くかと思ふのは、先生に對する最近の追憶及びそれについての所感である。

先生は實に懐しい、人の敬慕を引き得る人柄であつた。自分はその原因を考へて見た。先生が禮儀を重んじ後輩に倣られないといふこともその一つであらう。また先生が淡懷で城府を設けられなかつたこともその一つであらう。また先生が都會人としてほとんど自然に近い洗煉せられた談話術をもつてをられたこともその一つであらう。しかしそれらの根本に存したさらに重大な原因は、先生の誠實にあると思ふ。先生のなかにあつた誠實は他人の誠實と相觸れずにはゐなかつた。先生はかくのごとくにしていつも本物の尊敬者であつた。誠實をもつて先生に向ふ者は必ずそれに報いられた。先生は、社會的地位とか名聲とかあるひは矯飾とかによつてこの交通を妨げられることを少なくするだけの、天眞を多く恵まれた人であつた。かくして先生は他人のなからその誠實なる意志と、その眞實なる所有とを感じ得られる頗る敏感な嗅覺を有

してをられた。その代りにまた虚偽と粉飾とに對する強度なる潔癖を有してをられた。

先生に接した者、ことに先生と多少内面的な交りに入つた者には、多少なりとも皆先生に對してかくのごとき經驗を有するであらうと思ふ。先生の眞實に對する傾倒は、羨しいくらゐうぶなところがあつたと思ふ。先生から多少にしてもかかる敬意を與へられた者は、衷心よりこれを光榮に感じ、——これ人間の感じ得る光榮の最も醇なるものである、——また先生の前に自分の虚偽を恥ぢて、求めずして他人の前におけるよりも以上の誠實を先生に示すといふ結果になつた。先生の人のとしての最も價值ある點はここにあつた。實際先生に多少親しく接した者にとつて、先生くらゐその學識とか地位とか年輩とかいふ外的もしくは附帶的事情に妨げられず、直ちに其人と語り得るといふ感じのする人は少ないであらう。

率直にいへば自分もまた確に先生に對してかかる經驗を有した。自分は先生を衷心より敬愛し、また先生からも多少敬愛せられた、——もしこの詞が妥當を缺くならば、自分の有する多少の誠實が先生の敬愛を受け得たといふ方がよいかも知れない、——と、少なくとも自分だけは感じたことがあつた。先生は一見して狹介らしいに拘はらず、この一點においてはことに私のない、非個人的もしくは超個人的な要素を多く備へてをられた。自分

は先生に接した人、ことに始めて先生に接した人の抱く先生に對する傾倒の念は、主としてこの邊の消息より來るのだと思ふ。

我々の内で先生に對して無遠慮な批評を下したりするときにも、先生のこの根本の人格に對する敬愛をなくした者はおそらくなかつた。また我々に對して先生がはなはだしき酷評を加へられたときにも、先生は我々の誠實——もしあるならば——を踏つけにするといふ態度は一つも示されなかつた。この點において我々の先生に對する敬愛は、いろいろな點における變化にも拘はらず維持せられた。

けれども自分一個のことをいへば、自分は先生に對するこの敬愛の情を進めて、さらに先生に對する傾倒を盡し、先生のなかにほひれるだけはひるといふまでにはもとより至らなかつた。自分はこの意味において先生の弟子の内のささやかなる者に過ぎない。その原因は容易に他人と融合し得ざる自分の性格の硬さ、また自分の感情の適當なる表現に拙なる、悪い意味における粗野といふやうなこともその原因であつたらうと思はれる。とにかく自分は先生の前に十分に自由になり、——最も他人の前にあるときは比較することのできないほど自由であつたが——同時に先生にも自分に對して自由な態度を取つて頂くまでにはならなかつた。自分はそれのできた他の友人を羨しく思つたこともあつたが、自分の到底かくなり得ざること心得てゐた。先

生の許に集まつた人のなかには、熾烈にして純粹な傾倒の心を貫いて、一度全く先生に包まれてしまひ、やがて自分の自意識の生起とともに先生より離れ、しかもまた先生に歸らうとする間際に先生に死なれた人もあつた、すなはちいはば一旦先生からの墮罪を経た末、さらに先生への復讐を遂げんとして遂げ得ざりし遺憾を、切に感ずる人もあつたけれども、自分の先生を失つた感じはそれとは違ふ自分は先生のなかへ入り得ざることを先生の生前より感じてゐたけれども、いまになつてはそれが自分の回収し得ざる終生の遺憾となつてしまつた。

二

自分は先生に對する追懷の一つを語りたい。それは先生のなくなられる一ヶ月も前であつたらうか、そのときの日記がないから日は分らない。木曜の夜先生の御宅へ行つたときに、先生は少し氣持のわるさうなナゾッスな顔をしてをられたのが、席に着くとすぐ眼についた。そのとき座に大愚良寛の掛地がかつてゐた。良寛の話が前からあつたものらしい。座にゐた芥川君が「先生良寛が腹を立てないといふのは、始めからでせうか。修業を續んだ上でせうか」といふ意味のことをいつた。先生が「さうぢやない、自然にさうなつたのだ（言葉通りではないが、こんな意味であつたと思ふ）」といはれたのに對して、

自分は「やつぱりたびたび怒つたりした末、修業を續んでさうなつたのでせう」とかなり強く、いまから考へて見ればすこぶる無厭にいつた。先生はそれに對して不快な顔をせられて、「そんなことはないよ、腹が立つときには誰も腹が立つ。良寛だつて腹が立てば立つ。ただそれに執しなかつた。そのときはかりであつたのだ」といふ意味のことをいはれ、かつそれが實行上の修業といふよりもインテリクチュアルな悟りであるといふ意味のことをいはれた。自分はそれに對して少しく抗辯したけれども、何だか先生の氣分の平らかでないことが感ぜられたので、いつものやうにあくまで主張することを止めた。そのとき先生は先年の旅行に京都の寺で先生の經驗せられた話をせられたけれども、話の内にも少しく興奮してをられたやうに見えた。

その話も含く關係のないことでないから、ついでにいへば、先生が京都のある寺へ車で見物に行かれたとき、車屋が玄關へ横づけにしたので、先生はすぐ靴を脱いで上られた。そこへ納所坊主ができて、「何だ、斷りもいはずに上つて來て」といふやうな意味のことをいふと、すぐにそのまま引つ込んだ。それで先生は「さうか」といつてまた車に乗られた。そのとき先生は坊主が一言してそのまゝ直に引込んだ態度を感心せられた。すると以前の坊主が窓のところから「上出來、上出來」と怒鳴つた。それで先生は「ああ、あい

「駄目だ」と思はれたといふのである。この話も現前に應酬して執著澁滞のない態度に關するものであることはいふまでもない。

先生はさらにまたトルストイ、ドストエフスキの藝術に私あることを難じ、オースティンは作家として前二者より小であつても、私のない點において高貴なる藝術家であるといはれた。

私はその夜先生の議論にはまだ不服が多かつた。これはいまから考へて見れば、先生の所説を十分に解し得なかつたところからもきてゐた。それと同時に自分が先生に對していかなる態度をもつて反對したかを反省したり、また先生の健康や氣分がどうであつたか、先生のその語がいかなる體驗と思索とを背景とせるものであるかを熟慮したりするよりも先づ、自分の方では、先生が自分の反對を不快に思はれたらしいその態度を不快に思つたのであつた。さうしてその不平を歸の途でも友達に洩らしたりした。それからつまり自分のかかる反對は、先生に對する敬意と一向矛盾しないものであるといふことを、手紙で先生に書かうと思つた。しかし筆無精な自分はその手紙を遂に書かなかつた。さうしてそれから二三週間立つてまた漱石山房を訪うた。

それは十一月の十六日であつたらうと思

ふ。最後の木曜會であつたことは確かである。その日は先生は平常の通りに穩かになつてゐられたので、この間抱いてゐた自分の不平も、先生の溫容の前にはいつしか消えてしまつた。

そのときも、話は先生のモットーであつた則天去私といふことに移つて行つた。先生はその夜もトルストイやドストエフスキの作者としての私を難ぜられた。ついでに自分はこの點に關してもそのとき先生に同ずるわけには行かなかつた。さうしてその當時新聞に出てゐた『明暗』を讀んでは、トルストイやドストエフスキよりもはるかに先生の作に小さな私が多いと信じてゐた。この印象が改められるか否かは『明暗』をいまだ一度通讀して見なければわからない。

十時過にはほかの人々が歸つて、後に二三人ばかりが居残つたときに、自分は、現在の社會ではアリストクラシーがかなり樂易に肯定せられて、一人の贅澤なイゴイズムを遂げしめるために、他の多くが苦しまなければならぬやうな状態が非常に多い。樂に暮してゐる人、もしくはどうにか暮してゐる人の樂しみを更に増さうとするやうなことが、非常な大事となつてゐるが、そんなことには同情しなくともよい、それよりも生きるだけがむづかしい人間を生かしてやるのが第一の急務ではあるまいかといふやうなこと——自分がそのときいつた詞はおそらくこれよりも粗略で

あつたらう——をいつた末、しからば自分の生活をどうするか、自分のイゴイズムをどれだけ肯定するかといふ段になるとまた惑ひがおこる。例へば自分は現在かなり自分の生活に追はれて營々としてゐる者であるけれども、自分の生活には餘裕がないとはいへない。例へばかなり金持の友人が細君をもらつたとする。自分がその披露に招待せらるればまたその返報に祝の品を送る。かくのごときはどうしてもしなければならぬことではなない。しかし自分は一方にそれをしながら、他方には生きるだけのことができない者を顧みずにある。それかといつてそんな切實な必要ばかりを考へてみると、人生は暗くつまらなくなつてくるといふやうなことを言つた。先生はそれに對して自分はそんなことは苦にしない、そのときやりたければやる、そのときやりたくなければやらないまでだ、それを執著して苦しんだりするのはいけない、といふ風な意味のことを言はれた末、いま自分の前に急に自分の娘が一ツ目小僧になつて顯はれてきて、驚かないやうな心境になりたいといふことを力説せられた。

先生のそのときいはれたことはそれには盡きなかつたが、自分の心に強く印せられてゐることは、大方上のごときことであつた。自分はその後るときときその夜のことから前の

晩の大愚良寛のことを考へる。この二つはもとより一つの問題である。第一に先生のこの私を去つて天に則つたり、現前の事々物々に我執なく圓轉滑脱に應酬したいといふ要求は、先生にとつてはきはめて根の深い年久しいものであることを、自分は考へざるを得ない。それをしめすのは先生が非常に自分のイゴイズムに苦しめた人であるといふ事實である。先生の作中にはさまざまな形でこのイゴイズムの問題が取り扱はれてゐるが、晩年の作品になるほど次第次第にそれに深入して來られた跡がいちじるしい。さうしてその意味において次第に先生の作品に宗教的色彩をそへてきたこともまた認められる。ことに『明暗』の前の『道草』は、先生の作中他に類のない事實的な作品であるが、そのテーマとなつてゐるものは、やつぱり人間のイゴイズムである。あの作の主人公はイゴイズムを否定したり肯定したりした末に、自己の問題はいつまでも自己に歸つて終るところを知らないといふ嘆きを洩らしてゐるが、この苦しみこの嘆きはやがて、イゴイズムよりの解脱を要求する前提だと見られる。自分は先生のなくなられて間もないころ『道草』を読んで、上のごとき感じを一層切にした。先生の私を去つて天にのつとらんとする要求は、單に藝術上の描寫の問題ばかりでなく、先生の實生活上の問題であつたことを自分は疑はない。

第二に先生の從來の素質及び素養である。先生はキリスト教的な人格的の神を立する超神論的な宗教にはすこぶる縁遠い人であつた。先生の宗教は汎神論的であつた。私をさつて天にのつとるといふ境地はやつぱり、先生の汎神論的悟得から來た救ひであつたらうと思ふ。先生が禪學に多少でも親しんだり、また漢詩や文人畫等に高い境地を認めたこと、この心持を助けたこと、またこの心持に助けられたものであることを疑はない。先生は自分のイゴイズム、小我の差別的執著に苦しんで、無差別平等の世界を求めた。動の世界でなくて靜の世界、二元の世界でなくて一元の世界を求めた。しかしこの執著より無我へ、私より天へ、差別より平等へ、動より靜へ、二元より一元への跳躍は、いかにして可能であつたか。このことを自分は考へずにはゐられない。

先生の「やりたければやる、やりたくなければやらない」といつた境地は、たしかに緊縛を脱した自由の天地である。先生はもとより完全にこの天地に入つたとは考へてをられなかつた。しかしこの天地に對する強き憧憬と、またこれに達し得たのもしき希望とを、特に臨終前に持つてゐられたことは疑はない。しかし自分からしてこれを見れば、自分には先生のこの結論をおぼろに感じてそれに同じ得るとしても、先生のそれにおもむかれる過程をともし得ないといふ氣がどうし

てもする。自分にはまだなかなかこの二元的矛盾をミツシリと身に受けて、さらにこれを凌いだ末でなければ、この境地は望まれないといふ氣がする。したがつて自分は先生に比してこの二元的の矛盾相尅の境に一そうの價値を認め、執著を有することが深いやうに思ふ。これは自分の素質や教養と先生の素質との差別にもとづくものであると信じながら、やつぱり自分が先生に對してものたらなさを感じざるを得ない點の一つである。

自分は上のごとき點から先生の解脱がインテレクチュアルであつて、プラクティカル——深い意味の——といふ點において薄いといふ感じを掩ひ得ない。しかしもとより自分は先生の超脱の要求が、どのくらゐ先生の生活の血の出るやうな苦しみからきてゐるかを否定するのでない。しかもこれを認めながらやつぱり上の遺憾を掩ひ得ぬこともまた事實である。さらに先生がかかる解脱の道をとられたことが、先生の素養のほかに先生の素質にもとづけることを自分に思はせることは、先生が一方において自己のイゴイズムを痛切に意識する人であつたと同時に、無意識的にはすこぶる自由と洒脱との素質を恵まれた人であつたことである。先生はイゴイズムの陋室のなかにむせぶとともに、また心機一轉してかなり戸外の開豁なる空氣を呼吸しうる人であつた。さうして先生のこの素質が、先生の超脱の方向を規定するにあつた力があ

つたことが考へられると同時に、先生にとつて、かかる道をとられることの自然なことは、我々の同感の容易に追隨し得ざる程度であつたらうと思はれる。

先生が一方において非常に道德感の強烈な人であつたことは、先生の日常を知る人も、先生の作物を見る人もあきらかに感ずるところである。しかし先生は二元的對峙の間に努力奮進する意志的なプラクティカルな人といふよりは、事物があるがままに見て、靜かにこれを觀照するといふ觀察的 (betrachtend) あるひは藝術的、美的態度において、より多くそのエレメントにある人ではなかつたらうか。先生はおそらく「やりたい時にやり、やりたくないときにやらない」といふ境地に、いつまでも達し得なかつたトルストイの苦悶に、あまり同感せられなかつたらうと思ふ。よし同感はあるにしてもこれを貴いとは思はれなかつたらう。むしろ苦しい、いやな境地と思はれたであらう。この點において先生の藝術と宗教とは、トルストイの藝術と宗教とのごとく相矛盾し相戦ふものではなくして、むしろ相一致するものであつた。先生の宗教はこの意味において一種の藝術的宗教であつた。

先生の物に對する考へかたが、先生ぐらゐの年輩の人々に大抵しかるがごとく、實證主義的であつたことも、先生のいろいろな言説からうかがはれる。先生は奪ふべからざる道

道德の所有者ではあつたけれども、道德そのものに對する先生の解釋は、むしろ自然主義的であつたといつても大過なからうと思ふ。先生の事物に對する見方は、どちらかといへばむしろつねに相對的比較的なものであつた。先生は形而上學的思辨の人でなかつた。

自分は、先生の解脫は、知識的にはこの相對的、實證的の境地を守らんとしてこれを守り得ず、さらにこれを否定せんとする方向より開かれたものではなかつたかと思ふ。この否定とともに現前せんとするものは、すなはち先生の所謂天でなかつたらうか。先生の思想上の實證主義的、自然主義的傾向は、先生の汎神論的解脫の道を平らかにする點において、先生の觀照的藝術的態度と相協同したのではあるまいか。

しかもまた先生を自然主義的の境地に行かざるを得せしめた動力は、先生が主として自己のイデオイズムに堪へ得ざる道義的要求に存したといふことを觀過し難い。

以上は先生の最後の談話より先生の晩年の思想に對する可能な觀察點の二三を擧げたまでである。その細説はさらに後日にゆづりたい。

(大正六年五月)

距離感

一

ニーチェは屢、距離感 (Distanzgefühl)

といふ語を口にした。彼は凡人の特色をもつてこの感じの缺無にありと見た。この感じを缺くがゆゑに、凡人は偉大なるものと矮小なるものと、崇高なるものと卑卑なるものとを辨別することを知らない。したがつて事物の眞相を認識し感知することができず、實存するところの明白なる差別を拂拭し、微妙なるニュアンスを無視してしまふ。額に感ずる暖味によつて家畜の群の接近をすら感ずるくらゐに敏感なニーチェは、この心持の下に、ややもすれば一切の差別を普遍一の下に綜合せんとする哲學の事業を難じた。さうしてそれをもつて一種のごまかし、シュライエルマッヘン (ヴェーニールを造ること) とさへ貶しめようとした。ニーチェの貴族主義、その形而上學、理想主義に對する反對は、ここに基づいてゐる。彼の藝術家的差別感は、所謂哲學者の平等感、無眞實と感ぜしめたものであつた。

然しまた一方から考へて見ると、ニーチェの距離感の力説は、主として天才なる、また天才と信ぜる彼自身の特殊の位置に對する擁護、またこの位置を認めんとせざる凡俗に對

する憤激より來つたものである(ジョウベンハウエルもまた常にこの種の憤激を胸に燃しつつけてゐた)。かくて彼はますます自己の居場所を高く限つた、そして自己の周圍に柵を廻らして、他人のここに入るを峻拒せんとした。「余は余の周圍に柵を劃し、神聖なる限界を劃せり。山いよいよ高ければ余とともに登る者いよいよ少し」とはツアラトウストラの語であつた。かくて彼の所謂超人は人間界を超越して、純然たる超絶性を確保せんとした。しかも純然たる超絶性は神にさへ不可能である。超人をもつて理想とせるニーチェの生活の破れたのもまた、已むを得ざることであらう。自分はニーチェの自傳『この人を見よ』を読む時、ニーチェの距離感がその緊張の極度に達し、將にぶつりと切れんとする危険にをのがさるを得ない、ニーチェはジョウベンハウエルに比べれば一層純潔であつた、裏腹がなかつた、潔癖であつた、一向きであつた。ジョウベンハウエルのごとき喰へない爺といふところがなかつた。ニーチェが年壯にして狂し、ジョウベンハウエルがよく七十の齡を保ち得たのは、ここにも基づくであらう。

二

私がここに少し考へて見ようとするのは、この距離感のことである。天才はもとより偉大である、崇高である。天才と凡人との間に

は實にはかるべからざる距離がある。この距離の無視が人生の價值と意義とを没却することは、もとよりあまりに明瞭なことである。誠に天才は雲表に聳ゆる高峰のごとく仰ぎ視るべきものに相違ない。それは人間の至るべき高頂を示し、人生の尊嚴を示すものには相違ない。そこへ登り行くことはニーチェのいふごとく困難なことに相違ない。しかし山が決して大地を離れて中空に浮遊してゐないと同じやうに、天才もまた人間界を飛び離れては存在しない。天才の距離を主張する極、天才をもつて超絶的としてしまふのは、天才をもつて空中に浮遊せしめるものである。天才を我々と縁なき者たらしめるものである。しかも天才自身から言へば、自ら高くするに急なる結果、我と自らを限局する者である。自らを絶對的ならしめんとしてかへつて有限ならしめるものである。かかる意味における絶對的な天才主義は、やがてそれ自身を破壊するの已むなきにいたるのである。

さらにこれを我々天才でない者の側から考へて見れば、我々はかかる天才に反抗して全然それに亡ぼされてしまふか、あるひは自己を木石の如くに没却して、その奴隷となるかよりほかに仕方がない。かくて我々の自己は破却せられる。この意味においてまた絶對的天才主義は個人主義の破壊者である。詳しくいへば特殊なる個人を立てるがために、その他の個人を亡ぼすものである。我々は到底

かくのごとき状態には堪へ得ない。我々はどうしても天才と我々との間を「彼如此か」(Entweder-oder)との關係におかずして、「彼と此と」(So-wohl-als)の關係におかねばならない。ここにおいてか天才は我々の外に超絶せるものでなくて、我々の中に内在せるものでなければならぬ。眞の意味における天才の力の擴充はかくのごとくにして始めて遂げられ、我々にとつての天才の意義と價值とはかくして始めて認められるのである。

上のごとき見地に立つとき、我々は天才の我々との平等を見る、天才の我々と等しく人間なるを見る。よし天才と我々との間にいかなる距離があつても、いかなる深谷が隔てても、それは全然相別なる世界ではない。「思ひ入るにはさはらざる」ものである。

三

ニーチェが第十九世紀の平民主義を攻撃したのは、それが天才との距離を無視して、人生の光榮たり意義たる天才の力を犯すといふ點にあつた。ニーチェはもとより天才と凡俗との距離を力説するに急であつた。しかし彼の本意はおそらく天才の凡人における内在、凡人の天才における内在を攻撃したのではない。否むしろ天才の世界に住み得ざる凡俗が、瓦礫のごとくあへて天才の世界に押し入らうとする厚顔と僥倖とを咎めんとするにあつたのであらう。實際平民主義もしくは凡人

主義の主張が、人間としての、精神的人間としての平等權を主張せんとするとき、それがつねに英雄的平民主義たらんとせざることはない。換言すれば固定の超絶を破つて萬人をして人間性の偉大にあづかしめんとせざることはない。これすなはち言はば凡人を天才たらしめんとする、さらに適切にいへば凡人をして天才にあづかしめんとする、さらに語を換へていはば凡人をして天才の世界に、天才をして凡人の世界に内在せしめんとする運動ではないか。さればかかる運動には常に強きロマンティックの色彩がある。キリスト教が神の前に人間の平等を主張し、心の貧しき者の幸なるを唱へたとき、さらに下つてはルソーが萬民平等の思想を宣傳したとき、カントが道德的存在として人間の平等を獅子吼したとき、そこに凡人民主義は英雄主義と合體した、凡人もまた天才の感激を促されざるを得なかつた。そこには人間性の強き流動があつた。生命の高き跳躍があつた。父と子とまた夫と妻とを相反かしめるまでの激動があつた。無上命法の前に自然の傾向を屏息せしめんとする嚴肅なる緊張があつた。

物と物との差は分量の差である、心と心との差は性質の差であるとする。しかも物と物とは隔壁をもつて分ち得ても、心と心とはよくこの隔壁を貫いて相通する。差別と平等の二面を具へて相背かざるは、實に心界の神祕である。天才の距離と接近と、その超絶と内

在と、ここにも私はその神祕をみざるを得ない。

四

天才と凡人との平等と差別とは、私をして個體と全體との關係を思はしめる。個體が何故に別々の存在に來つたかの起原を論ずることは、不可能であらう、いまの問題でもない。しかし個體は遂に全體の一部分である。すでに一部分である以上は、それは全體との關係を斷つわけには行かない。それは部分として制限を受けるにいかはらず、全體と相繋がる。全體と相交感する。そして自己の部分に閉ぢこもつて自ら限らうとしない。な

となればかくするときそれはもはや部分でなくして孤立となる。個體の孤立はやがてその死にはかならない。これ有限物としての約束である。しかも全體はまた部分を離れてない。かくのごとき全體は超絶的浮遊的となつて、それ自身に矛盾を生むからである。全體の生命は個體に宿る。個體はそれぞれ異なる制約を有する、これ個體の相異なるゆゑである。しかしながら天才も凡人も要するに全體の一部分である、一現象である。天才と凡人、さらに廣くいへば總ての差別ある個體の平等は、ここに根據を有しなければならぬ。我々の與へられた制約とは、動かし難きものである。この意味において天才と我々との距離は嚴存せざるを得ない。しかもそれが

全體の部分である以上、同一全體の現はれである以上、天才の偉大は我々と縁なきものではない、また我々を壓迫するものではない。

私はここに至つて個性の意義を思はざるを得ない。おのおの獨特なる制約を有せる個人は、その制約のためある程度まで各、独自の個性を發揮する。この與へられたる制約はある程度まで移すべからざるものである。我うに運命づけられてゐる。されば我々はあくまでも我々自身たるべきである。我々は天才の力を讃嘆しても、それから鼓舞されても、我々は竟に我々である、彼等ではない。全體の生命を實現する道は、我々に與へられたるものによつて、我々自身の道によつてこれをなすほかはない。その以外の道は徒らに焦躁を興へるのみである、浮ついた盲動を興へるのみである。我々のなすべきところは、徒らに四方から欲深く掻き集めることではない。我々の與へられたところのものを實現するにある。これ實に最も眞摯なる、しかも最も勇氣を要する我々の生活である。けれども我々個人の生活の究竟の目的は、徒らに差別相を設けるにあるのではない、我々の我々自身ではなく、我々を眞實に實現せんがためである。換言すれば眞に我々自身たらんがためである。その差別相は全體生活を實現せんとするに當つて、有限なる個體としての已むを得